

受難節第3主日

「嗚呼、主の瞳、眼差しよ」

申命記33章26〜27節

ルカ22章54〜62節

(1)

ルカ22章61・62節は4福音書の中で、特に興味深い箇所といえます。

「主が振り向いてペテロを見つめられた。

ペテロは、『今日、鶏が鳴くまでに、あなたは、

三度わたしをしらないと言う。』といわれた主のおこたばを思い出して外に出て、激しく泣いた。」

主が振り向いてペテロを見つめた時の眼差とは、いかなる眼差しであったのでしょうか。

「たかが眼差し」と言われるかもしれませんが。

しかし、母親のまなざし一つで、わが子は喜びもし、悲しみもします。あるすぐれた教育者は、「こどもを教えるには、手をかけるだけではダメ、眼をかけてやらねば」との助言があります。

カトリック教会の功德の一つに「ほほえみ」があります、わたしはなにもできませんという人でも「ほほえみ」という施しはできます。

「目は口ほどにものを言う」とも言われてきました。

わたしは二十歳という若さで、生きるすべをうしなっていました。そうした時、一人の伝道者のあたたかなまなざしと出会った瞬間「生きよう」という決定的な転機を与えられました。

神社の門前には、仁王立ちした左右一對の仁王像があります。あのような恐ろしい目でペテロは見つめられたのでしょうか。それとも、彼を無視するような目、シカトとした目でしよつか。「冷目(なめ)」という目もあります。「駄目」という目もあります。「イエス・

キリスト」は、いかなる眼差しでシモン・ペテロを見つめたのでしょうか。

主イエスは、マタイ6章22・23節で「目はからだのあかりである。だから、あなたの目が澄んでおれば、全身も明るいだろう。しかし、あなたの目が悪ければ、全身も暗いだろう。だから、もしあなたの内なる光が暗ければ、その暗さは、どんなであろう」とおっしゃいました。

「眼」は「心の窓」です。眼を見れば、その人の精神状態、心理状態、健康状態までもわかります。「眼差し」にはその人のすべてがあらわれています。

救世軍の指導者、「山室軍平」は、「権威ある眼差しの説教者」といわれてきました。会衆に悔い改めを迫るときになると、「お父さん・お母さんが、今のあなたのことをお知りになったら、どんなに悲しまれるでしょう・・・」と、涙ながらに迫ったといえます。

ところで、「主のおこたばを思い出して、ペテロは、外に出て、激しく泣いた」というのですが、そのわずか数時間前に、主イエスはペテロにこう注意を促しています。

「シモン、シモン。見なさい。サタンが、あなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました。しかし、わたしは、あなたの信仰がなくなるように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」

この主イエスの言葉に対して、シモン・ペテロは、「主よ。こいっしよになら、牢であろうと、死であろうと、覚悟はできております」と胸を張って答えました。

しかし、人の弱さを知り尽くしておられた主イエスは、「ペテロ。あなたに言いますが、き

よう鶏が鳴くまでに、あなたは三度、わたしを知らないと言います」と事前の忠告を受けています。

もし、主イエスが振り向いてペテロを見つめた時、「ペテロ、注意したではないか」という冷めた目で見つめていたとしたら、この時のペテロには救いはありません。

「宗教(レリジヨン)」という言葉には、『結びつく』という意味があります。「キリスト」と「わたし」との結び付きとは、わたしの決意や決断にすべてがかかっているのでしょうか。

(2)
イエス様は、「あなたは、わたしを知らないというであろう」と前もって言われましたが、それよりさらに前に、「シモン、シモン。わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました(ルカ22章32節)」と言われたのです。1、ペテロのつますきに先んじて、「あなたの信仰がなくならないように、祈りました」とは何とも不思議なお言葉です。

しかし、ここにこそ、キリストとわたしたちの不思議な関係があります。

ペテロの決意・決断が破れ、キリストを公然と否認し、否定するという最悪の瞬間においても、彼の背後において、主イエスが祈っておられたというのですから、これは、もう、わたしたちの思いをはるかに超えた「わたし」と「キリスト」との結び付きと言わねばなりません。

ペテロは、この致命的なつますきをへて、それまでとは、まるで違う次元の結び付きへと引き上げられました。

申命記33章27節に、「とこしえにいます神はあなたのすみかであり、下には永遠の腕が

ある」(33:27)とのみ言葉があります。まさに主イエスを否定した瞬間でも、ペテロを支えていたのは、下にある、下からの神の永遠の腕でありました。

振りかえってペテロを見つめられた主イエスの眼差しには、神の一人子である本質があらわれていたといえないでしょうか。

「主イエスは昨日も、今日も、いつまでも同じです」(ヘブル13:8)。「たとえ、わたしたちは不真実であっても、キリストは常に真実であり、自分を偽ることができないからである」(②テモテ2:13)1、ここに主イエスの本質があります。

目の前で平然として裏切る弟子のペテロ―その彼に、「あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました」という事前のとりなしの祈りがなされていた、―このような結び付きは、人間の常識や尺度を当て分るものではありません。

「嗚呼、驚くべきイエスの愛よ」というほかありません。

仮に、主イエスが振り向きさま、「やっぱり言った通り、わたしを裏切ったではないか」と、ペテロを見つめたとしたら、これはもう救いようのない、目を覆いたくなるようなせい惨な場面です。その後のペテロはありません。

人間の欠点や弱さが露わにされることは、時に必要かもしれません。しかし、それだけでは人は生きる力も、再起しようとする意欲も出てきません。

日本の父親は、わが子を励ますより、残念ながら、「減点主義」が多いようです。これでは、わが子は次第に自信を失い、生きる氣力を失います。

振り返ってペテロを見つめられた主イエスの

眼差しの奥には、人の弱さをトコトン知り尽くしておられたお方の憐れみ深い眼差しがありました。

ペテロが、「あの人は知らない」・「あの人は関係ない」・「イエスなどという名前すら聞いたことがない」―、こうまで、うそぶき、完全に、主イエスを否認し、否定したペテロの背後にあって、その時もお、主イエスとのりなしの祈りが彼を支えていました。こうした事実から、宗教改革者たちは「聖徒堅忍の法」という驚くべき教理を生み出しました。

「一度、神によって選ばれた聖徒は、恵みの状態から、全的にも、最後のにも、墮落することはありえない」という確信に導かれました。

ペテロが主イエスを裏切り否認した時でも、なお彼を「信仰者」として見つめておられたとしたら、これはあまりにも並外れた関係です。常識では判断できません。奇妙な言い方ですが、「神のみが人間を信頼しうる」と言うほかありません。

(3)

相手を否定したり、裏切れば、よりをもどすことは至難の業です。

ところが、銀貨30枚で主イエスをユダヤの議会（サンヘドリン）へ売り渡そうとしたユダに対して、主イエスは何といいましたか。

「なんてお前は、馬鹿な奴だ、愚かな男だ」とは言いませんでした。

「自分を裏切るユダに、その時も、何と、「友よ」と呼びかけたのです。最後の瞬間まで、ユダの本心呼び戻そうと、「友よ」と呼びかけました。ところがユダは、その呼びかけに、正しく答えませんでした。

ここに、ペテロとユダとの間に、根本的な違いが生じました。

自分を愛するものとは付き合えても、自分を裏切るもの、敵対するものを受け止めるだけの器量も度量もわたしにはありません。なぜでしょうか。

「たとえ、わたしたちは不真実であっても、キリストは常に真実」とのみ言葉があります。が、わたしたち人間には、キリストのように、不真実なものを真実にする力が残念ながらありません。

主イエスは十字架に架かりながら、「父よ。彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのかわからずにいるのです」と祈られました。わたしたちには、この祈りの真意がなかなか分かりません。

刑事の取り調べ室には「魔の時間」というものがあります。もしかしたら、ペテロは、何をしているかわからないまま、自分の意に反したことを口にしたのかもしれない。

「もし分かっていたら、栄光の主を十字架につけるようなことはしなかった」①コリント2:8」というみ言葉があります。自分の意に反して「あの人は知らない」・「あの人は関係ない」・「イエスなどという名は聞いたことすらない」と完全に否定したのかもしれない。

ヨハネ福音書15章のブドウの樹の譬えを、みなさんと数週間前、目にとめました。そこでは、わたしと主イエスとの関係は、幹と枝との関係にあることを学びました。

自分の熱心と努力と精進とにより、信仰生活が持続できたと胸を張って言える人がいるでしょうか。そうは問屋が卸してくれませんか。

正直に言いなさい―、シグザクな迷走を繰

り返してきたではないか、UP・AND・DOWNという経験を経て今に至ったのではないか、自分の努力と精進とがすべてなどといえるものではありません。

むしろ、「私たちは真実でなくても、キリストは常に真実である。」「自分を偽ることができないからである」と告白すべきではないか、私たちは、常に不真実に傾きます。偽るものです。しかし、キリストはどこまでも、真実であり、偽らないお方です。

ですから、今にいたるまで、どこまでも、わたしたちを信仰者として見つめておられたので、私たちはキリスト者としてとまれたのではないでしょうが。

「信心」と「信仰」とは根本的に違います。

「信心」は、自分の「決意」・「決断」・「頑張り」・「熱心」が全てです。

しかし、「信仰」はそれとは、根本的に違います。「あなたがたが救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなた自身から出たものではなく、神の賜物である」(エペソ2:8-9)、「恵みによる」という事実が信仰者をうみだしました。誇る者は主を誇らねばなりません。

「七転び八起き」という諺がありますが、例え、七度のつまずき、七度の転びがあったとしても、主イエスは、一度の究極的な「起き上がり」・「本心に立ち返る」ことを期待しておられるお方であります。

ペテロが「外に出て激しく泣いた」という箇所を、宗教改革者のM・ルターは、「慰められた絶望」と受け止めました。ペテロよ、何度罪を犯しても、憐れみの主よ、とすがりつきなさい。それでいいのです。

最後に第1テモテ1章12節以下を読んで終わります。

「わたしは、自分を強くして下さったわたしたちの主キリスト・イエスに感謝する。『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきて下さった』という言葉は、確實で、そのまま受けいれるに足るものである。わたしは、その罪人のかしらなのである。しかし、わたしがあわれみをこうむったのは、キリスト・イエスが、まずわたしに対して限りない寛容を示し、そして、わたしが今後、彼を信じて永遠のいのちを受ける者の模範となるためである。世々の支配者、不朽にして見えざる唯一の神に、世々限りなく、ほまれと栄光とがあるように、アーメン」

シモン・ペテロは、このつまずきを通して、「あわれみをうけた見本」となりました。

【祈ります】

父なる神さま、わたしの努力・精進のすべてが今日にいたらしめたものではありません。いかなるときも、「下には永遠の腕がある」といわれているお方の支えにより今日にいたりました。感謝のほかありません。これからも主を誇りとして歩むものとならしめてくださいませ。

主イエス・キリストの名により祈ります。

「アーメン」。